



TITLE:

# 明代における雑役の賦課について： 均徭法と九等法

AUTHOR(S):

岩見, 宏

---

CITATION:

岩見, 宏. 明代における雑役の賦課について : 均徭法と九等法. 東洋史研究 1965, 24(3): 323-346

ISSUE DATE:

1965-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152700>

RIGHT:

# 明代における雑役の賦課について

——均徭法と九等法——

岩 見 宏

- まえがき
- 一 明初における雑役賦課の基準
- 二 均徭法と戸等との關係
- 三 丘濬のいわゆる九等法
- 四 九等法から門銀へ
- あとがき

まえがき

明代における役法の研究については、戦後かなり多くの業績が發表され、従前不明だった事實を明かにし、誤解されていた點を正したことも少なくない。しかしそれにもかかわらず、現在なお未解決の問題は至るところに残っていると言つて、決して言いすぎではないであらう。ことに明代中期については、關連史料が乏しいこともあって、その

變遷を跡づけることが非常に困難である。従つてあえて明代の變遷を論じようとすれば、部分的な知見を全體に擴張するか、または國初あるいは後期のかなり確かと思われる事實をもとにして推論するほかない。本稿でとり上げる雑役についていえば、數年前までの研究成果を筆者流に簡単にまとめると、およそ次のようなことではなかつたかと思われる。すなわち、明初においては里甲正役つまり里長や甲首等の役が十年一回の輪番制であつたのに對し、正役以外の雑多な官廳勞務に服する雑役は、一應上中下三等の戸等を基準として割りあてられることになつていたが、服役の週期は不定であり、基準も少し年代を經過した時期には甚だあいまいとなり、地方官の恣意に委ねられる面が大きかつた。その上雑役全體の量的な増大もあつて、負擔の

不均衡という問題が大きくなる。これに對する改革として十年一役の均徭法なるものが出現し、正統年間に江西で始められたものが次第に全國に普及した。やがて正徳・嘉靖ごろになると、再び新たな種々の改革が行われるようになり、それらが雜役以外の正役やさらに田賦の問題とも關連して、総合的な賦役改革としての一條鞭法の普及に歸結して行く。この間に均徭の中には銀納の發展にもなつて銀差と力差との區別を生じていたが、一條鞭法に至つてそれが一應全面的な銀納になつた。<sup>①</sup>

きわめて簡略ではあるが、右のようにまとめて大過はないと思われる。ところが一九六一年に發表された谷口規矩雄氏<sup>②</sup>および六二年に發表された山根幸夫氏<sup>③</sup>の論文で明かにされたところによると、山東を中心とする華北においては、一條鞭法施行前の雜役は、門銀・丁銀という形で賦課されており、同時期の江南その他の地方の均徭とはかなり異つた形態をとっている。一方ではこの門銀・丁銀に對しても均徭という名稱も使用されているから、名稱だけからいえば、先の要約と矛盾しないようでもあるが、實質的には均徭に二種の形態が存したことになる上、一條鞭法以前

に雜役の銀納化が一應完成していたとも考えられる。となると、このような門銀・丁銀はどのようにして出現したのか、それと舊來の均徭法との關係はどうかなど、いろいろ新しい問題が生じてくるわけである。

本稿で筆者が企てたのは、戸等の問題を軸として雜役の賦課基準の變遷をたどり、併せて門銀の起源に若干の照明を與えようということであつて、右のような諸問題を全面的に解明するなどということは、もとより企て及ばぬところである。

# 一 明初における雜役賦課の基準

從來一般に言われているところでは、明初の雜役は三等九則の戸等を基準として割り當てられたとされる。大まかに言えばそれでよいのであるが、少し詳しくみると、戸等を基準とすることになったのは、洪武十八年（一三八五）以降のことであつた。すなわち明太祖實錄同年一月己卯の條に、

命天下府州縣官。第其民戸上中下三等。爲賦役冊。貯於廳事。凡遇徭役。發冊驗其輕重而役之。以革吏弊。

とあるのがそのはじめである。<sup>④</sup>これより先、既に里甲制が施行され、戸籍兼賦役の賦課臺帳としての賦役黄冊が作られていたことは周知の通りであるが、<sup>⑤</sup>右の記事中の賦役冊は、下命當初の段階では一應黄冊とは別に作られたものと思われる。というのは、これまたよく知られる通り、黄冊は十年に一度作成されるもので、この當時は洪武十四年に作られたものが使用されていたはずであり、従つて別に帳簿を作るのでなければ、黄冊に戸等を註記することを命ずれば足りるわけである。「爲賦役冊。貯於廳事」という表現は、明かに新たな帳簿の作成を意味するもので、在來の帳簿に對する追加事項の記載を意味するとは考えられない。

しかし洪武二十四年（一三九一）の黄冊作成のときからは、右のような賦役冊が別に作られたかどうかは疑わしい。すなわちそれが別に作られたことを示す明文が存しないばかりでなく、黄冊自體に戸等が記入され、それを基準として雜役がわりあてられることになったからである。黄冊に戸等の記入されたことは、太祖實錄洪武二十三年八月丙寅の條に載せられた、戸部が翌年の黄冊作成にそなえて

行つた上奏中に、

其上中下三等入戸。亦依原定編類。不許更改。

とあり、萬曆會典卷二〇黄冊の條に見える洪武二十四年奏准の撰造黄冊格式にも、同じ文章があつて、右の下にさらに、

果有消乏事故。有司驗其丁產。從公定奪。

と述べられている。

また洪武二十六年にできた行政法典たる諸司職掌の中にも、二か所にわたつて黄冊と戸等の關係を示し、それを徭役わりあての基準とすべきことが記されている。どちらも戸部職掌の民科に見えるのであるが、まず丁口の條には、

……仍每十年本部具奏。行移各布政司府縣。撰造黄冊。

編排里甲。分豁上中下三等入戸。遇有差役。以憑點差。

とあり、また賦役の條には、

凡各處有司。十年一造黄冊。分豁上中下三等入戸。仍開

軍民竈匠等籍。除排年里甲依次充當外。其大小雜泛差

役。各照所分上中下三等入戸點差。

とある。いずれも黄冊に記載された入戸に上中下の等級を附し、その等級に應じて差役をわりあてるということであ

る。このように黄冊に戸等が記載され、それを基準として差役のわりあてを行つたとすれば、單に各戸の戸等を示すだけのことで別の帳簿を作つたとは考えられず、洪武十八年の賦役冊は黄冊に吸収されたと考えるのが妥當であらう。

ともかくこのように戸等を基準とするわりあてが洪武十八年以後のものとすれば、短い期間ながらそれ以前のわりあては何を基準としていたかは、一應確めておく必要があるであらう。それについては洪武元年にできた大明令が一つの材料になる。この明代最初の行政法典は、不備なものではあるが、徭役に關する若干の規定を含んでいる。いずれも兵令の中に見えるもので、まず額設祇候人等という項には、祇候・禁子・弓兵の三種の役について定められており、そのわりあてについては納糧二石以上三石以下の戸を僉充するものとされている。また水站の水夫については五石以上十石以下の納糧戸をあて、さらに急遞鋪の鋪司および鋪兵については、「有丁力糧近一石五斗之上二石之下者點充」ということになっている。これらが大明令に見える徭役のすべてであるが、ここに共通して見られるのは、わ

りあて基準が税糧負擔額に置かれていることである。洪武初期からわりあて基準の判明している徭役としては、このほかに均工夫があつて、それは田土面積を基準とするものであるが、この役は明代初期に國都近邊の地方から徵發された特殊なもので、宣德年間を最後として消滅するようであるから、後の時代への變遷を問題とする本稿では除外することとする。<sup>⑧</sup>

ところで右のように大明令では納糧額を基準とされた役のわりあては、前述した洪武十八年の命によつて、すべて戸等を基準とすることに變つたのかというと、必ずしもそうではなかった。諸司職掌に載せられた規定は、洪武二十六年當時現行のものと考えられるが、その中で大明令に規定のあつたものがどうなっているかを検討してみると、弓兵について兵部職掌職方部設置巡檢司の條に「於丁糧相應人戸内僉點」と記されているだけで、祇候と禁子については明文がない。個別的に明文がないものは當然一般的規定に従うものと考えられるから、やはり前引の賦役の條の規定に従つて、戸等に應じてわりあてられたものと考えてよいであらう。弓兵に關する規定も、戸等を基準とすること

と矛盾するものではなく、一種のいい換えられた表現と考えられる。あるいは戸等の具體的内容として丁と糧の二要素があったと考えてもよいであろう。都察院職掌の出巡の條下に列擧された事項の中には、

科差賦役。仰本府。凡有一應差役。須於黃冊丁糧相應人戸内。週而復始。從公點差。……

とあつて、戸部職掌賦役の條と對應すべきものであるが、そこに「所分上中下三等人戸」とあつたものが、ここでは「丁糧相應人戸」となっているのである。

それはともかくとして、祇候・禁子・弓兵の三者については、戸等によるわりあてが行われたと考えられるのに對し、兵部職掌駕部驛傳の條下を見ると、他の鋪司・鋪兵および水站水夫については、大明令の規定がそのまま踏襲されて、相變らず納糧額によるわりあてが規定されている。のみならず馬驛の驛夫、遞運所の人夫・水夫など、驛傳關係の役は、みな税糧額が基準とされている。驛夫は上馬百石、中馬八〇石、下馬六〇石、遞運所の人夫は一五石、水夫は五石以下の糧戸から點充するというわけである。尤も五石以上を基準とする水驛の水夫などの諸役については、

必ずしも一戸で當る必要はなく、糧額の合計が基準額に達する數戸が共同して、交替で服役することが認められている。

驛傳關係の役のうち鋪司・鋪兵は別として、その他の役は明代後期になると、里甲・均徭・民壯の三者とならべて四差と稱せられることが多いが、均徭にまとめられた一般の雜役に對して、驛傳の役が區別されて別の取り扱いを受けるようになった由來は、このように洪武年間から既に、わりあて基準の相違という形で現れていたのである。

このように基準が二種類になった理由あるいは意味については、今深く考える餘裕を持たないが、ただ戸等方式の採用について考えられることとして、雜役をわりあてられる對象が、農民だけには限られないということが出てくる。城市に居住し、そこに宅地や家屋を所有している者も、産業を考慮して戸等を定めることになれば、ある程度上位に格付けされる場合も出てくるであろう。税糧だけを基準とすれば、全くわりあての對象にならなかった戸が、戸等方式の採用によって、新たに雜役のわりあてを受けることになったのではないかということが、一つの可能性と

して考えられるわけである。これと関連して、上述してきた中には見えなかった役で、専ら市民すなわち都市の住民を対象として課せられる役の出現も注意しておかねばならない。その一つは税課司税課局の巡欄であつて、萬曆會典卷二〇賦役の條に、つぎのように見えている。

洪武二十一年令。税課司局巡欄。止取市民殷實戶應當。

不許貪點農民。

今一つは洪武二十四年に設置された馬夫の役で、その出現については前に述べたことがあるから、ここには繰りかえさないが、市民が充當された點では巡欄と同じである。

このように市民に役をわりあてる際には、一般的に言つて税糧は基準にならず、農民の場合とは違った基準が必要となる。この際いくつかの要素に基いて戸等が設定されておれば、個々の役のわりあてをするたびに、種々の條件を勘案する手間が省け、農民・市民を通じて、一應それなりに負擔の均衡を計ることもできたであらう。

以上の検討を通じて、明初における雜役賦課の基準としては、最初税糧額が採用されており、ついで驛傳關係の役を除いて戸等を基準とすることに變つたと考えられる。税

糧額を基準とする場合には、税糧の一定額が一定の役目と對應關係にあつたことは、既に見た通りである。然らば戸等を基準としてわりあてを行う場合、戸等と役目との間の對應關係はどうなっていたか。既に述べてきたところからも察せられるように、その點に關する統一的な規定は見當らない。實際問題として、州縣によつて上・中・下戸の間の比率も同じではないであらうし、戸等と役目との間に固定的な對應關係を規定することは、かえつて不均衡を生ずるものにもなるであらうから、これは規定されていないのが當然であらう。もっとも、個々の州縣においては、それぞれの實情に應じて、ある程度戸等と役目との對應關係を設定しているところもあつたであらう。牧民心鑑も、戸等を分けて、何等の戸は何の役に充てるべきかを定めるべきだとしている。<sup>⑧</sup>またずっと後の記録になるが、たとえば弘治常熟縣志卷三差役の條には、上戸は京師遠難料解の類に充てられ、中戸は隸兵・齋夫・門禁の類に充てられ、下戸は役を免ぜられるということが見えるし、康熙朝邑縣志卷八藝文に收録された萬曆二年の進士雷士楨の「代知縣趙公條鞭議」の中には、舊規として上戸に充てられる役を四

種、中戸に充てられる役を五種ばかり擧げてゐる。しかしこれとて縣によつては、上戸と中戸との境界のところ、年によつて變動する役目のあるような場合もあったであらうし、必ずしも固定的なものとして考えることはできない。

## 二 均徭法と戸等との關係

明代初期の問題については、一應前節に述べたように理解して次に進むと、雜役に關する改革として最初に大きくとり上げられるのが均徭法である。均徭法については山根氏の研究<sup>⑨</sup>が世に出てから既に久しく、いまさら説明の要もないと思うので、ここでは行論に必要な點だけを取り上げたい。

山根氏の結論に従えば、均徭法の要點は(1)甲單位に服役するもので、正役に服したのち五年にして雜役にあたる。つまり雜役だけについていえば、十年に一度定期にわりあてられる。(2)賦役黃冊のほかに均徭冊が編定されて臺帳となり、それには主として税糧の多寡を基準とした、ということになる。ここで従前と異なる點は、均徭冊というような

帳簿のことを別とすれば、十年に一回の定期的なわりあてと、その基準が主として税糧の多寡によつたという二點である。第一點については、從來は輪番制だったことを除けば何の定めもなく、不定期的だったと考えられる。第二點については、のちにはむしろ田土が主な基準になることが多かったとされるが、いづれにしても、戸等はもはや實質的な意味を失つたのかどうかということが問題になるであらう。

この點をもう少し詳しく考えると、均徭冊には戸則の高下に從つて上等戸から順次書き並べられたとされるから、その限りにおいては戸等はなお重要な意味を持つてゐるかの如くである。しかし山根氏によれば、戸則の順位は黃冊を基準とすべきところ、多くの場合黃冊は無視され、専ら田土(又は税糧)の多寡が重視せられたという。ここから二つのことが考えられる。一つは均徭冊には從來の黃冊の場合とは異つた基準による戸則が設定される場合が多かつたということである。第二は田土又は税糧といった單一の要素によつて戸則をきめるくらいならば、必ずしも戸則を設けなくとも、田土面積又は税糧額を直接に基準とすれ



ば、均徭冊の配列も簡單正確にできるはずだということである。ということは均徭冊における戸則は、全く形式的なものとなり、實質の意味が失われたということになる。複数の要素を勘案して設定されてこそ、戸則は實質的な意味を持つのであって、單一の要素によるならば、逆にいえば無数の等級を設けることもできる。戸を順序に排列するだけのためなら、全くよいなことではあり得ないと思われる。しかも複数の要素を勘案して定められたと思われる黄冊の戸等も、實際の徭役わりあてに活用されないのであるから、これまた無用の長物となってしまうわけである。

このように考えるならば、均徭法に与つての戸等の意味は、ごく形式的なものであって、漠然と上中下等というのが便利なのはあつても、それをさらに細分した九則などは、何ら均徭法施行に必要な條件ではなかったということになる。もっともこの點については、從來の見解は必ずしも明確でなかった。というよりも、むしろ均徭法の特徴の一つとして、三等九則に格づけされた戸に對して、その負擔能力に應じた役をわりあてるものと理解されることが

多かった。確かにそのように理解される史料もあるが、初期の均徭法に關する記述の中には、戸等・戸則について言及したものはなく、それを考えたとすれば、洪武十八年以來の上中下三等の區分が踏襲されたとみるほかないのである。九則ということになれば、規定としては勿論のこと、慣行としても、一般化するのには成化以後の時期を待たねばならない。<sup>⑩</sup>つまり從來不可分の如く考えられていた均徭法と三等九則の戸則との結びつきは、創行期に關する限り、理論的にも實證的にも、甚だ根據が薄いとしなければならぬ。その結びつきがあるとすれば、それは後から加わつたものであり、均徭法の普及過程ないしはそれ以後における一つの變質を示すものだと考える方が、より妥當なように思われるのである。

ところで近年明かにされた山東の門銀・丁銀は、この戸等・戸則との關係において著しい特色を示している。すなわち兩者はともに三等九則による戸の格づけを基準として賦課されるもので、たとえば門銀は上上戸兩、上中戸何兩というふうに、州縣ごとにはっきり定められている。その點において前述した初期均徭法における戸等の役割が、

きわめてあいまいなものと、かなり異るといわねばならない。同時にまた、門銀・丁銀は毎年全負擔者に課せられるものであつて、その點でも均徭法の輪番制とははつきり異つていたと言ひ得るであらう。厄介なのはこのように初期均徭法と相當大きなへだたりのある門銀・丁銀が、なおかつ均徭とよばれることがある點である。實質が變つても古い名稱がそのまま使用されるということは、至るところで見られる現象で、それ自體別に珍しくもないが、この際は混亂を避けるために、均徭法について廣狹二通りの場合を區別しておくことが必要であらう。つまり狭い意味では、前述したような創行期に見られる性格をもった均徭法を指すものとする。廣い意味では、明代中期以後における雜役のわりあてを總稱するものとする。門銀・丁銀が門均徭・丁均徭とよばれるのは、勿論後者の場合になる。但し本稿で以下に述べる際は、通常これを狹義のものとして使用することとする。

さてこのような門銀・丁銀の出現は、一條鞭法以前における雜役賦課の改革として、かなり重要な意味を持つと思われるが、そのはじまりについては今一つ明確でない。谷

口・山根兩氏は、ともに嘉靖山東通志の記載をもととして以下のように述べられた。嘉靖初年に山東では「以地出庸者」「以戸出賃者」「以社出牧者」「以丁出役者」という役の分類が行われていたが、このうち以戸出賃者は華中・華南の銀差に、また以丁出役者は力差に當る。そののち役の全面的な銀納化とともに、これが門銀・丁銀という名稱で徴收されるようになった。「以戸出賃者、以丁出役者」というような分類が成立した時期は、華中・華南における銀差・力差の別が生じた時期に對應するものと思われることであるから、具體的には弘治から正徳にかけてのころになるであらう。さらにそれが門銀・丁銀という形になるのは、谷口氏によれば嘉靖二十年ごろと推定されている。また山根氏によれば、門銀・丁銀という形による雜役の負擔は、山東ばかりでなく北直隸・山西・河南など、廣く華北一帯に行われており、それが一條鞭法の實施とともにふたたび形を變えて、地銀・丁銀になって行くというわけである。

門銀・丁銀という形は、その名稱からしても雜役の全面的な銀納化をまづはじめて出現したもののように思われ

るが、その場合三等九則という格づけを基準とするようになったのは、銀納化に際してのことかそれともそれ以前からのことか。まだ銀納化といっても、部分的なそれであると思われる「以戸出賃者」の出現の時期か、それとも「以丁出役者」までもが銀納化した時期か。このように疑問を抱くと、前述した初期均徭法から門銀・丁銀までの間には、今少し研究を進めなければ簡単にはつながりをつけ難い距離があるように思われる。そこで次には成化から正徳までの期間を中心として、このような問題に手懸りを與え、そんな事實を探求してみよう。

### 三 丘濬のいわゆる九等法

前節において筆者が均徭法と門銀・丁銀とが直接にはつながらないという意味のことを、ことさらに強調したのは、實はつぎのような丘濬の記述を重視したがためにほかならない。すなわち大學衍義補卷三一、制國用、傳算之籍の一節に、

竊嘗以九等之法。與均徭之法計之。譬如官有粟十石焉。九等之法。官使民日負一石。十日而盡其十石也。均徭之

法。官使民一日而負十石之粟。日負一石。雖有往返之勞。然輕而易舉也。一日而負十石。往返雖不煩。然以一人一日而爲十日十人之事。雖強有力者。固有所不堪矣。況單弱者哉。

とあるのがそれである。ここでは九等之法というものが均徭法と對比されている。その大意はこういうことであろう。たとえば官に十石の粟があるとして、九等の法は民に一日一石ずつ運ばせ、十日間で終了させるものであり、均徭の法は一日に十石運ばせるものである。一日一石であれば毎日往復する手間はかかるが、軽くて容易である。一日に十石運ばせるのは、往復の度数は一回ですむから簡単なのであるけれども、負擔量としては一人十日分、あるいは一日十人分になるわけで、強力な者でも運び切れない。この比喩はもう少し條件をつけなければ、充分に妥當なものではないであろうが、言わんとするところは、均徭法が十年一役であるのに對し、九等の法は毎年皆役であり、その代りに負擔額は十年一役の場合の十分の一になるから、この方が人民としては樂だということであろう。

ここに述べられた均徭法と九等法の、いずれが門銀・丁

銀制とより近い關係にあるかは、あらためて解説する必要もないであろう。九等法という名稱は、直ちに門銀・丁銀賦課の基準となつた三等九則を想起させるし、また毎年皆役という點でも共通している。しかし九等法というのは現實に行われていたものかどうか。その點について、われわれには耳新しく感ぜられるとしても、丘濬自身の表現の仕方、讀者もまたこれについてなにがしかの知識、少くとも名稱くらいは知っていることを前提として書かれているようであり、また現實に行われていた均徭法と同じように扱っている點からしても、これまた現實に行われていたものであると判斷してよさそうである。

前節で從來均徭法と三等九則の制度とが結びつけて考えられることが多かったと述べておいた。實は筆者自身も、史籍に散見する三等九則の戸等によって役をわりあてたとか、九則の法を行ったというような記事は、均徭法という名稱を用いないで均徭法のことを述べたものと、最近まで理解していた。しかし右のように、均徭法とは異つたものとして九等法が並存したとすれば、從來漠然と均徭法に結びつけられていた三等九則關係の史料は、すべて再検討を

要することになるであろう。ただ實際にはそれらの史料はきわめて簡略で、具體的に内容の検討ができるものは殆ど存在しない。そこでここには、丘濬が念頭に置いていたのはこれではないかと思われるものを、一つだけ指摘しておくこととする。

それは湖廣で何喬新が行つたというもので、かれの文集である椒丘文集外集に收められた椒丘先生傳に、

已陞湖廣右布政使。……荊民以徭役不均。訟于臺。劉公又檄先生理之。先生驗其丁口登耗貨產厚薄。列爲九等。

以輕重授役焉。民咸稱便。

とあるのがそれである。何喬新は成化十六年に湖廣布政使から山西巡撫になつたから、湖廣在任はその前の數年間のことである。そして文中の劉公とは、成化十年三月から同十五年九月まで湖廣巡撫の任にあつた劉敷を指しているから、結局右の事實は成化十五年九月以前のことと考えられる。これは大學衍義補完成の前八年ないし十三年のことで、時期としては大學衍義補の敘述にとり入れられて何ら矛盾はない。また内容の點では、きわめて簡単な記述であるため、九等ということが九等法との關係を考える唯一

の手懸りであるが、その點今一步の推定を進めるべき手懸りが、他にもないわけではない。というのは、椒丘文集卷三二に收められた「題爲隱匿賊情等事」という上奏である。これは何喬新が成化二十二年刑部右侍郎のとき、四川湖廣の境界にある播州土司の楊愛に關する事件を調査するため特派され、翌年調査結果を報告したもので、その中につぎのような一節がある。

本年二月内。有本州里老張洪等。連名告稱。凡遇進貢等項公差人員。通年俱於各里點差人夫。津貼盤纏。節被差去之人分外勒取數多。情願預先認納銀兩。免致臨期逼迫。楊愛准聽。照依有司均徭事例。上戶納銀十兩。中戶納銀四兩。下戶納銀一兩五錢。備造手冊。委頭目周從肅。照依等第。徵收在官。遇有公差人員。量計程途遠近。將前銀支給。

はじめに本年とあるのは、成化十九年のことで、ここに述べられたことがら自體は、勿論土司内のことであるが、照依有司均徭事例という一句が注目される。この句はそのあとの上中下戸に分けて銀兩を徵收するやり方が、均徭という名のもとにはあるが、土司でない一般地方官の管轄下

で行われていたことを示している。そしてここには表面三等の區分しか出ていないが、各等にわりあてられる十兩、四兩、一兩五錢という銀額は、上戸が十兩、八兩、六兩、中戸が四兩、三兩、二兩、下戸が一兩五錢、一兩、五錢というような、上から下までの九則の存在を示しているとも理解できる數字である。<sup>⑧</sup>もしそう理解できるとすれば、前に何喬新が布政使として湖廣で行った九等に分けて役を授けたというのが、そういうやり方を始めたものではなかったかと考えられてくる。ただこの場合、戸等に應じた銀が、果して毎年わりあてられたものかどうかは明かでないが、何年に一回というように特記されていないことが、かえって毎年わりあてられることを意味しているとも考えられないではない。ともかく丘濬のいう九等法に引きあてて考える可能性は、かなり大きいものと判斷してよいであろう。

その上何喬新と丘濬との間には、かなり密接な關係があった。兩者はともに景泰五年の進士で、いわゆる同寅の關係にあり、また丘濬の文集中には喬新が福建按察司副使に赴任するのを送る序があり、逆に喬新には濬に寄せた手紙や、濬の死に際しての祭文などがある。<sup>⑨</sup>このような關係か

ら考えると、濬が喬新の地方で實施したことを聞知していた可能性は大きい。

以上のような諸點を綜合判斷すると、丘濬が九等法について述べたとき、その腦裏にあったのは、恐らく何喬新が湖廣で行ったものではなかったかと推定されるのである。

但し九等法が湖廣だけに行われたものであるならば、これを華北における後の門銀と關係づけて考えることは困難であるが、實際にはかなり廣い地域で同様な方法の行われた可能性がある。名稱の點からだけでも、たとえば盛頤が天順年間に北直隸束鹿縣で行い、のち成化十九年から二十一年まで巡撫として山東に在任中に實施したという九則法<sup>⑤</sup>なども、同様なものであった可能性がある。

その邊の事實はどうであつたにせよ、丘濬の記述を信用する限り、成化年間において既に均徭法と並んで九等法が存在したわけであるが、その九等ということについては、やはり成化年間に、一つの規定が出されていることに注目しなければならぬ。それは萬曆會典卷二〇賦役の條に見えるつぎの令である。

成化十五年令。各處差徭。戸分九等。門分三甲。凡遇上

司坐派買辦採辦。務因所派多少。定民輸納。不許隔年通徵銀兩在官。

戸を三等ではなく、九等に分けることを規定した明代の法令としては、恐らくこれが最も時期の早いものではないかと思われる。表現は異っているが、意味としては三等九則に分けるというのと、全く同じことであろう。ただここで差徭といわれるものの内容は、上司から坐派された買辦・採辦ということとで、これまでとり上げてきた雜役とは少し違い、むしろ從來の理解からすれば上供あるいは公費として里甲の負擔、すなわち正役に含まれるものと考えられよう。

しかしここで想起したいのは、門銀と關連して山根・谷口兩氏が既に指摘しているように、華中・華南で里甲の負擔とされていた上供物料や公費が、華北では銀差の中に多く見出される事實である。この現象は華北ばかりでなく、四川・湖廣や南直隸などにも見られ、また同じ華北の中でも、省によって多少在り方が異っていたようであるが、とにかく相當廣い範圍にわたって存在した。それについてはまだ發表された研究はないが、筆者の知見の及ぶ限りで

は、もと里甲の負擔であつたものが、雜役の方に移行したというようなことを示す記録はなく、少くとも相當早い時期から、雜役としてわり當てられていたものと思われる。

そしてその種の負擔は、里甲負擔の研究<sup>⑧</sup>によつても明かにされているように、成化の頃から、數量あるいは金額の上で急激に増加したと考えられる。成化十五年の令は、そういう新たな負擔が急増する狀況のなかで、そのわりあてを出来るだけ公平に行わせる意味で出されたものと理解してよいであらう。しかもそこにはこれを里甲に負擔させるべきか、あるいは雜役として負擔させるべきかについては、何ら規定されていないのである。そこから考えると、地方の事情や從來の慣行から、結果として華中・華南では里甲の負擔になり、華北や四川・湖廣などでは雜役としてわりあてられることになったと理解するのが、最も妥當なように思われる。そしてそれらの地方では、九等に分けられた戸等に應じてわりあてるといふ方式も、同時に普及することになったのではあるまいか。

成化十五年令をめぐつて、右のように理解することができるならば、成化から弘治にかけて（さらにそれ以後もた

えずつけ加わるのであるが）、華北などの雜役には多數の新項目が附加されていったであらう。しかもそれは銀の形による負擔であるか、またはたとい上司からのわりあての際には物の形で要求されていたとしても、結局は銀で支辨され得るものである。一方では以前から存した雜役についても、銀による納入が行われるようになる。雜役における銀差・力差という區別が成立するのが、嘗て説かれたように弘治の中年以後であるとすれば、華北の銀差の中には、當然このような新項目が含まれることになったはずである。

むしろ項目數としては新しいものの方が多かったであらうから、それ以前の雜役のわりあてがどのような基準で行われていたにもせよ、九等の戸則に基いてわりあてるといふ新方式が、銀差全體に及ぼされたとしても、別に不思議ではないであらう。成化十五年令から考えるなら、銀差というような名稱の普及する前から、そういう事實は進行しつつあったとみるべきであらう。とすれば、丘濬のいう九等法が、先に推定したように何喬新の爲したことを念頭にしたものであつたにせよなかつたにせよ、華北などにおいては九等法という名稱でよばれてよいような雜役のわりあて

が、ほかにも實際に存在したと考えて、少しも差支えないのである。

#### 四 九等法から門銀へ

前節においては、丘濬のいう九等法を、成化十五年令と結びつけて、筆者の考えたところを述べたのであるが、それだけではあまりに推測的部分が多く、且つ地方におけるその實情がほとんど不明である。しかし現在のところ大學衍義補と同時期の地方的史料は、残念ながら殆ど發見し得ないでいる。この點識者の教示を俟つこと切であるが、ここではそれを補うものとして、弘治以後、門銀・丁銀の出現までの間を埋めるような、若干の史料を取り上げてみよう。但しこれとて全く不十分なもので、九等法と門銀・丁銀との間に、完全なつながりをつけるようなものでないことは、豫めお断りしておかねばならない。むしろそのための手懸りを探るという程度のことである。

まず第一に注目されるのは、正徳朝邑縣志卷一田賦に見えるつぎの記述である。

弘治以前。丁賦力差。供歲足。則止不派。故能以三十六

里。更用而迭休之。以後乃通取焉。所以然者。以用聽差者。聽差者。差已足。無差而聽差也。聽差者。官盡收銀而貯之庫。上戸丁九錢至七錢。中戸丁六錢至四錢。下戸丁三錢至一錢。畸零者丁一錢。於是無空民矣。

ここで述べられたところによると、弘治を境として聽差というものが成立し、それは力差に當らない戸丁から、九則の戸等に従って銀を徴收したものと解せられる。そして聽差が行われるようになると、空民がなくなったといわれるが、その意味は何であろうか。空民なしというのは、畸零の丁に對してまでも聽差が課せられたことを強調しているとも取れるが、前に迭休・通取という二語を對にして使っているところから考えると、すべての民が力差・聽差いずれかの負擔に當ることになった、つまり聽差の出現によって、輪番制から毎年皆役に變った、という意味に解すべきであろう。

それではこのような聽差の出現したのはいつからであろうか。右の朝邑縣志の表現では、弘治年間までは聽差がなかったようにも解せられるが、はっきり正徳になってから現れたときめられない、あいまいな表現である。しかし



聽差ということば自體は、既に弘治元年の令に現れている。すなわち萬曆會典卷二〇賦役の條に、つぎのように載せられている。

弘治元年令。各處編審均徭。查照歲額。差使於該年均徭人戶。丁糧有力之家。止編本等差役。不許分外加增餘剩銀兩。貧難下戶并逃亡之數。聽其空間。不許徵銀及額外濫設聽差等項科差。違者聽撫按等官糾察問罪。奏請改調。不學者坐罪。鎮守衙門。不許干預均徭。

これは從來均徭が全國的に施行されたことを示す史料として理解されてきたものである。今その點はしばらくおいて、この中に聽差が禁止事項としてとりあげられているのは、この時期に聽差という名稱が、かなり實際に使用されていたことを示すものであろう。とすれば、成化の末には既に一部地方で聽差が出現していたと考えられる。朝邑縣の場合に事實どうであつたかは不明であるにしても、可能性としては成化末からと言ひ得るわけである。

さらに聽差という名稱にこだわらずに、事實の方から考へるならば、憲宗實錄成化二年八月辛丑の條に載せられた給事中丘弘の上言中に、つぎのような注目すべき敘述があ

る。

只憑籍冊。漫定科差。孤寡老幼。皆不免差。空閑人戶。亦令出銀。故一里之中。甲無一戶之閑。十年之內。人無一歲之息。

これは均徭が行われて以來、徭役のわりあてがでたためになつたことを力説している箇條の一節であるが、本來役の當らないはずの者にもわりあて、また非番の戸に銀を出させるので、結局毎年全戸が役に當る實情になつていゝのである。これは朝邑縣志が聽差の成立と關連して述べていることと、正しく同じ事情である。丘弘の上言の結果、こういう不都合は一應嚴禁されたはずであるが、もちろん根絶はできなかったであらう。むしろこういう狀態が定着化した地方もあつたと考えられ、その中から聽差というようなことばも出てきたのであろう。

聽差については、銀差・力差と並べられることもあるが、右のように考へてくると、その出現の時期は、從來知られている銀差・力差のそれよりも、一段と早かつたといふことになる。ことばの意味の上から言つても、必ずしも銀差・力差と一緒にして考へる必要はなく、單に差役のう

ちの特殊なものとして聽差とよばれたと解してよいであらう。そしてそれが實際の形としては朝邑縣志に記されたように、九則の戸則によって銀をわりあてたものだとするれば、丘濬のいう九等法と、名稱は異っても内容は同じである。大學衍義補と最も近い時代に、九等法に相當するものを地方でさがせば、聽差はきわめて有力な候補としなければならない。

もっとも朝邑縣志に記された聽差の語義や弘治元年令に額外に濫設するなどと言われているところからも明かなように、聽差が最初から九等法に當るものだったとは考えられない。はじめはやはり豫備費的な性格のものだったと思われる。しかし上からのわりあてがつぎつぎに増加して行く中で、聽差が次第に膨脹し、やがて本末顛倒して、銀納の雜役はすべて聽差で賄われるようになったのではあるまいか。しかも弘治元年令によって、聽差という名稱には憚りができたので、一部の地方を除いては、雜役の分類項目としての聽差という名稱は定着しなかったのである。現に朝邑縣においても、萬曆續志になると、銀差と力差の細目が記載してあるが、聽差は出てこない。ということとは、聽

差という名稱が銀差に置き換えられたと解釋されるわけである。

聽差が名稱通り單に豫備費的なものに止まっていたのではないことは、それが雜役の分類項目として定着した北直隸の例を見ても判ること、たとえば天下郡國利病書に收録された大名府志徭役志には、語義の説明とは別に、  
歲計所入天子犧牲果品物料之需。以及歲貢科第。諸所雜出之費者。曰聽差。

と記されている。具體的に金額を記録した地方志も、いくつか存在している。但しそれらの例では、全體としてずっと額の大きな銀差が並存する<sup>⑤</sup>。従つて聽差は雜役中のごく一部を含むにすぎないのではないかとの疑問も生じうるが、さきの朝邑縣の場合などは、他に銀差を擧げることなく聽差だけを記し、しかもそのわりあて額が、あの時期としてはかなり大きく<sup>⑥</sup>、その点からも後の銀差に相當するものを全部を含むと解しなければならないのである。ただその際に問題となるのは、この聽差が丁に對して課せられていることである。銀差が門銀としてわりあてられたという、これまでの研究成果から考えると、丁にわりあてられ

た聽差がそのまま銀差になったとすれば、門銀とは直接にはつながつてこないのである。

この點をどう考えるべきか、朝邑縣自體についての手懸りは存しない。ただ他の地方の例で參考になるかと思われるのは、一つは萬曆澤州志卷七徭役の條に見えるつぎの記述である。

澤之差銀。不編於地畝。而編於人丁。雖九則與他處同。

而上丁徵銀至二兩七錢。則他省直所未有也。

これは地銀の代りに丁に課したというのであるから、恐らく一條鞭法實施以後の事情を述べたものであらう。その前がどうだったのかは判らないが、つぎの蔚州の例から考えると、もともと門銀はなかったという可能性もある。そこでいま一つ崇禎蔚州志卷三徭差に見えるところを引く。

均徭銀差上上戸毎丁銀九錢。上中八錢。……下一錢。

共徵銀二千九百三十三兩……○力差隨戶級高下輕重定之。係本戸自行顧覓。與別處徵條鞭銀不同。

これははっきりと銀差を丁銀という形で課した例としなければならぬ。朝邑縣の場合も、この蔚州と同じ形だったと考えることもできよう。そうなると銀差は門銀という形

でわりあて、力差は丁銀になったということも、一概にはいえなくなるわけである。もう一つ北直隸懷柔縣の例をあげておこう。萬曆縣志卷二徭役の條に、舊府志としてまず編頭五六頃該銀三三四兩なにがしという數字をあげ、そのあと今徵各則丁銀共一三〇八兩錢と總計を示したのち、上上から下下に至る丁銀の單位額を列記している。つぎには力差として天財庫庫夫一三名以下が列記されている。そして別に銀差ないしは門銀とか地銀という項目は存在しない。してみるとこの場合も、はじめの丁銀というのが、銀差に相當するものだと考えざるを得ないのである。右の懷柔縣志の例から思いあわされるのは、何瑋が北畿の州縣について述べていることである。既に藤井宏氏が引用して詳しく検討された文章であるが、何柏齋先生文集卷六の均徭私論の中に、

或曰。祖宗差役之法。今亦有行之者乎。曰。北畿州縣。

審編均徭。初止審三等九則戶門。並不註定差銀多寡數目。

審定戶則。然後通算三等入戶。除役占優免外。該當差者共有若干。却算本州縣銀力差。該用銀共計若干兩。方令三等九則戶丁。差等出銀。期足供銀差力差之用而已。此

蓋遵祖宗之法。而又通其變者也。

とあるのがそれで、藤井氏の指摘されるように、三等九則の戸に對してではなく丁に對してわりあてられるといっているのである。この文章は嘉靖十一、二年ごろに書かれたと推定されているから、その點から考えると、北直隸では懷柔縣志に見えるように、銀差を丁にわりあてるとというのが、はじめの一般的な形ではなかったかと思われる。

このように考えてくると、雜役のうちの銀納のものが合算されて、戸則に應じてわりあてられるようになった段階で、わりあての對象が戸であつたか丁であつたかは、遽かに斷定しがたいものがある。むしろ、いずれの場合も存在したと考える方が無難ではあるまいか。山東や山西では「以戸出贖者」という名稱があつたところから、當然戸が對象だつたとも見られようが、その山西にも澤州のような例があつてみれば、この名稱だけで判斷するのは、他に用例のないことばだけに、いささか躊躇せざるを得ないことになつてくる。そして戸を對象とするにせよ丁を對象とするにせよ、九則に格づけされた戸則に應じて、毎年銀がわりあてられたとするなら、それは九等法という名稱でよばれ

て少しも差支えないわけである、後の門銀との關連を考えるとすれば、むしろ一部の地方では、ある時期になつて戸を對象とするように統一されたと思定することもできるであらう。

以上朝邑縣志の聽差を中心として、九等法に接近したものの存在を考えてみたわけであるが、つぎには門銀という形の上限を探つてみたい。もともと山根氏は、名稱は別としてその實質の成立時期を、銀差・力差の別が生じた時期と考えられた。その點門銀と丁銀を對應するものと考え、力差が銀納化して丁銀の成立した時期に、門銀も成立したと考える谷口氏とは異つてゐる。但し筆者としては單に戸を對象として役銀がわりあてられたというだけではなく、戸則に應じた定額の銀がわりあてられるというところに、門銀の特色を認めたい。従つて銀差が成立しても、それが本來の役目單位に某役若干兩というような形でわりあてられたとすれば、未だ門銀とはいえないと考える。そういう問題があるので、門銀成立の時期はやはり史料の上から具體的に検討しなければならない。

その點でとり上げられるのは嘉靖元年序のある彰德府志

で、同志卷四田賦の論の中には、つぎのように述べられている。

有力賦。門子・皂隸・庫子・斗子・禁子・鋪兵・防夫。

有銀賦。上戸十二兩。遞減至下中戸四錢而止。

この力賦・銀賦という名稱が、實際に用いられていたものか、それとも編者の氣どった表現なのかは別として、實質的に力差と銀差に相當するものであることは既に谷口氏の指摘した通りである。そして銀賦は上戸十二兩から、遞減して下中戸四錢までというのであるから、この場合も戸が上上から下下までの九則に分けられ、そのうちの上八則が負擔して、下下戸は免除されていたと解すべきであろう。

このように九則に分けられた戸を對象として銀をわりあてていることは、實質上門銀とみて差支えない。既に小山氏が指摘された康熙扶溝縣志の例も、嘉靖四年のこととして、上上門から下下に至るまで、五兩から遞減して二錢に至る銀差の負擔が記録されている。この場合も銀差についてののみ、戸則によるわりあてが行われたと解され、小山氏は「少くとも河南の一部では嘉靖四年には既に門銀が成立していたと見られる」と述べている。門銀という名稱自體が

出ていないことは、扶溝縣志の場合も彰德府志の場合も同じで、下下戸に負擔がかかるか否かの違いはあっても、彰德府志の銀賦が實質的に門銀であったことに紛れはない。

むしろ門銀という名稱の使われていないところにその成立の初期の状況を見ることも出来よう。そしてこのように門銀とみられるものが、嘉靖元年にできた彰德府志に記載されていることからすれば、それが正徳の末年には存在していたと判斷してよいであろう。すなわち門銀出現の上限は、河南では正徳末まで溯りうるというわけである。しかもこの際注意すべきは、谷口氏が考えたように門銀と丁銀とは、不可分離の對をなすものではなく、名稱はともかく、實質的には門銀だけが早く成立したと考えられるのである。

もっとも、河南ではその後嘉靖十一、二年ごろに、巡撫吳山によって、丁・田に銀をわりあてる均徭則例なるものが行われた<sup>⑤</sup>というから、彰德府志に見えるような門銀と思しきものが、そのまま直接的に門銀・丁銀の門銀につながると思えないが、途中で屈折はあったにしても、丁銀と對應する意味での門銀の先驅であったことはまちがいない

であろう。そして門銀成立の上限がここまで溯るとすれば、時期としては前述した朝邑縣志に見えるような聴差とも接續するわけである。同じ地域の時間的に連續した材料ではないから、もとより斷定的なことは言えないが、筆者としては本節の考察を通じて、門銀の起源を丘落いうところの九等の法に求める可能性が出てきたのではないかと考へている。

### あとがき

以上四節にわたって述べたことは、推測が多くて結論の出せるようなものではないし、そうかといつて假説といふほどにもすじの通つたものではなさそうである。しかし一應まえがきに對應する形でまとめてみれば、本文の敘述と多少力點のおきどころが違つてくるかも知れないが、およそつぎのようなことであろうか。

明代における雜役の賦課は、最初戸の納入する税糧の額を基準として定められた。洪武十八年以降は、驛傳關係を除いては上中下三等に格づけされた戸等を基準としてわりあてられることになる。やがて均徭法が實施されるが、そ

の場合形式的には戸等を基準とする方式に變更はなかつたけれども、中・南部地方では實質的に田土面積または税糧額を基準とするようになり、戸等の持つ意味はきわめて薄くなつた。一方成化ごろから均徭の非番の戸に對して銀をわりあてる風が一般化し、同時に上供物料や公費の新たなわりあては、九則に格づけされた戸則を基準として行ふべきことが規定された。かくして華北ではこの上供物料や公費が多く雜役に編入され、それが戸則に應じて毎年わりあてられることになる。これが九等法とか九則法とかいわれるものである。但しその際わりあての對象は必ずしも戸とは限らず、丁である場合もあったと考えられる。またそういうわりあてを聴差と稱している例もある。嘉靖年間に入るころ、雜役を銀差と力差に分けることが普及すると、おむね銀差が戸則に應じて戸にわりあてられ、これがちに門銀とよばれることになる。一方力差も銀納化されて丁銀になるが、丁銀もやはり戸則を基準としてわりあてられるので、華北では一條鞭法の實施に至るまで、九則の戸則が、雜役賦課の基準として明確な存在を保つわけである。

以上まことに粗末な考察ではあるが、門銀制度の源を

どこに求め、明代雑役の變遷をどのように理解するかについて、若干の私見を開陳した。當然論ずべくして論及しなかった点や、論じて足りなかった点も多く、いろいろ問題のあることは自分でも承知しているが、識者の批判を仰ぐ意味で、あえてまとめてみたわけである。他日より充分な形で再論することができれば幸甚である。

## 註

① 雑役を中心として明代における役法の變遷を扱った論文としては、山根幸夫「十五六世紀中國における賦役勞勦制の改革」(史學雜誌六〇—一一)があり、同じ著者の「一條鞭法と地丁銀」(筑摩書房、世界の歴史第九卷所收)には、簡潔な解説がなされている。

② 谷口規矩雄「明代華北における銀差成立の一研究——山東の門銀成立を中心として——」(東洋史研究二〇—三)。

③ 山根幸夫「明代華北における役法の特質」(清水博士追悼記念明代史論叢所收)。

以下本稿で言及する谷口・山根兩氏の門銀・丁銀に關連する見解は、すべて前註および本註の論文によるものである。

④ この記事は、既に小山正明氏がその「明代における税粮の科徴と戸則との關係」(千葉大學文理學部、文化科學紀要七)の中に引用されている。後引の諸司職掌の二か條についても同様である。なお公式の規定としては實錄洪武十八年のものが最初であるが、小山氏はこれに先立って實錄洪武十七年八

月壬辰の條に見える南昌府豐城縣民曾伯敬の上言を引用しておられる。そこには「宜以賦税之家。編爲等第。凡有差役。定注其名」と述べられている。さらに實行された例として、洪武四年から八年まで、濟寧の知府として在任した方克勤について、宋濂はつぎのように述べている。

先生與民約定。爲簡書。列其丁產。爲上中下三等。等復析爲三。每有徵發。恒視書爲則。吏不敢並緣爲姦。(四部叢刊本宋學士文集卷四七、故愚庵先生方公墓版文)

上中下の三等をさらに三分したものであるから、つまり上から下下に至る九則に分けたということであろう。何孟春も餘冬序錄卷二四にこれを引いて、「春按。此今日三等九則之法也」といつている。このように戸等を九分することはいうまでもなく宋代の先例に倣って考えられたものである。なお方克勤は例の方孝孺の父で、右の事實については明史卷二八「循吏傳」や、明書卷一三八「循良傳」にも見えている。

⑤ 従前里甲制の設定、黃冊の作成は長い間洪武十四年に始まると考えられていたが、少くとも一部地方においては、洪武二三年ごろから、洪武十四年以降とはほぼ同様の里甲が組織されていたことは、近來研究者の間で定説となりつつある。この點に關しては鶴見尚弘「明代の畸零戸について」(東洋學報四七—三)三七頁以下を参照されたい。

⑥ 均工夫については山根幸夫「明初の均工夫について」(東洋學報三九—三)およびこれを批判した藤井宏「明初に於ける均工夫と税糧との關係」(東洋學報四四—四)がある。

⑦ 戸等が何を基準として定められたかについて、明代後期の材

料については藤井宏「創行期の一條鞭法——傳漢臣の上言をめぐる諸問題——」（北海道大學文學部紀要九）に詳細に論ぜられており、また山根・谷口兩氏も問題としている。しかし明代初期に關しては、これを考える同時的材料が乏しく、勿論法規上の明文も存在しない。ただ本文に述べたほか、萬曆會典卷二〇戸部賦役の條に載せられた洪武十七年の令には各處徭役。必驗丁糧多寡・產業厚薄。以均其力。違者罪之。

とあって、この翌年に戸等に關する規定が出されたことから考えると、右のような基準をはっきりした等級として表現したものが戸等であり、従つて戸等決定の基準としては、丁糧だけでなく産業の如何もとより上げられたと考えてよいであらう。

⑧ 拙稿「銀差の成立をめぐる——明代徭役の銀納化に關する一問題——」史林四〇—五、六一頁参照。

⑨ 既に小山氏によつて引用されたものであるが（④参照）、牧民心鑑卷下、均力役の條にはつぎのように見えている。

官有差役。民須爲之。民有富貧。官宜斟酌。如校尉・巡邏・斗級・庫子・水馬驛遞運所夫・皂隸・弓兵・舖兵等項。役有難易。事有輕重。皆須上依典章。下驗民力。分爲三等九甲。何等之戶。可充何役。編成等第。籍爲定冊。

この意見も、州縣ごとに實情に應じて戸等と役目との對應關係を定めるべきことを言っているわけで、逆に言えば戸等と役目との間に統一的對應關係のなかつたことを示すものとも見られるであらう。

⑩ ①にあげた第一論文。

このように言いきるのは少し問題かも知れない。成化以前においても、既に④で指摘した方克勤の例のほか、公式に戸等制が行われた後についても、⑨にあげたように牧民心鑑は三等九甲を説いている。ただしこれは永樂初年の書であるから、均徭法とは直接には關係がない。また景泰年間には江西都昌縣の知縣となつた孔鋪が、戸を九等に分けて役を定めた（明史卷一七二）というが、江西の均徭法は一旦廢止されたのち、景泰元年に復活したとされるから（①の第一論文五〇頁）、この場合は均徭法のことを指しているかも知れない。しかしまた、均徭法では通常九等に分けるというようなことがなかつたので、孔鋪の方法が特筆されることになつたとも考えられる。要するに役をわりあてるのに戸を九則に分けるという例は、少しは存在するけれども、それと均徭法との結びつきを證明するようなものは見當らないということである。

⑪ この點については小山氏が若干の疑問を存しているが（「明代華北賦・役制度改革史研究の一検討」東洋文化三七、一〇五頁）、筆者としては問題ないと考えている。

⑫ 湖廣郴州の人何孟春が、その著餘冬序錄卷五六に、今日之法。戸列九等。門分三則。

と述べていることも、湖廣における九等の存在を裏書きするものと考えられる。

⑬ 丘濬については丘海二公文集所收丘文莊公集、何喬新については前引の椒丘文集を検した。丘濬の場合は、瓊臺類稿を精



査すれば、もっと材料が出てくるかも知れない。

- ⑮ 孝宗實錄弘治五年正月丁酉條に見える盛順傳、あるいは明史卷一六二楊瑄傳に附せられたかれの傳中に見える。

- ⑯ 小山正明「明代華北賦・役制度改革史研究の一検討」(東洋文化三七)一〇五頁参照。なお南直隸の場合は、一應鳳陽巡撫の管轄下、すなわちほぼ今の安徽省に當る地域に限って見られるものと思われる。

- ⑰ この點もまた谷口氏が既に少しふれているが(前掲論文二四頁)、上供物料や公費の全部が銀差に含まれている場合、一部が銀差に一部が里甲負擔になっている場合、銀差と聽差・里甲に三分されている場合などがある。

- ⑱ 山根幸夫「明代里長の職責に關する一考察」(東方學二)、同「丁料と銅銀―福建における里甲の均平化―」(和田博士古稀記念東洋史論叢所收)などを参照。

- ⑲ ①の第一論文五五頁、および⑧の拙稿参照。

- ⑳ この記述は早く山根氏によって部分的に引用され(①の第一論文五四頁)、近年また谷口氏(②の論文三一頁の註⑤)、鶴見氏(⑤の論文五四頁)も引用している。ことに鶴見論文には、全文についての略解が示されているから参照されたい。また谷口論文では、この記述によつて、朝邑縣志のできた正徳十四年ごろに、銀差・力差・聽差という分類が行われていたと解するが、筆者の見解がそれとは異なることは、以下の本文で明かにされるであらう。

たとえば嘉靖眞定府志卷一二籍賦の均徭の條には、銀差が七萬五千餘兩、力差が七萬四千餘兩であるのに對し、聽差は九

千六百兩と記されている。そして銀差の内にも、上供や公費の一部が含まれている。崇禎元氏縣志の例では、聽差の比率は一層小さく、銀差が六千四百餘兩、力差が二千餘兩であるに對し、聽差はわずかに三〇兩にすぎない。

- ㉑ 丁にわりあてられる場合は、戸にわりあてられるよりも、ずっと額の少いのが普通である。山根氏が引用された萬曆蒲臺縣志の例は嘉靖年間のことであるが、門銀が上上戸四兩から下中戸一錢までであるのに對し、丁銀は上上戸七錢から、遞減して下下戸七分に至っている。この丁銀は朝邑縣の聽差より低額である。また萬曆武定州志に見える丁銀の額は、上中から始まっているが、八錢から下下の一錢に至るもので、朝邑縣の聽差の場合と丁度同じである。これらより高額の例もいくつかあるが、いずれも時期的には朝邑縣の聽差よりかなり後のものであることを考慮しなければならぬ。

- ㉒ ⑦の論文三二頁参照。

- ㉓ ②の論文三二頁、註⑤参照。そこでは谷口氏は力賦・銀賦という名稱だけを引用している。

- ㉔ ⑬の論文一一頁、註⑦参照。

- ㉕ 何柏齋先生文集卷六均徭私論のなかに、

近聞巡撫吳公所定均徭則例。每地一頃。出銀四錢。每人一丁。上上戸出銀一兩二錢。以次各照戸則出銀不等。とみえている。詳しくは⑦の論文四四頁以下を参照。